

トウルー・ヌーン

2009年 ブルーレイ カラー 83分 タジキスタン 日本語・英語字幕付き

監督：ノシール・サイードフ

プロデューサー：ルスタムジョン・ジョニエフ

脚本：サファール・ハクドドフ

撮影：ゲオルギー・ザラエフ

音楽：ダレル・ナザーロフ

出演：ユーリー・ナザーロフ

ナシパ・シャリポフ

ナスリディン・ヌリディノフ

ショーディー・ソレー

※ブルーレイ・ディスクは35ミリプリントからテレシネにより作成したものです。日本語字幕が見つらい箇所があります。ご了承ください。

(物語)

タジキスタンの上サフェドビ村。年老いたロシア人の気象観測士キリルは、ソビエト連邦の崩壊後、家族がロシアに帰った後も一人で観測所を守っていた。しかしロシアとの間では郵便も止まり、無線の通信も困難になっていた。キリルは、助手を務める村娘のニルファを後任にしてロシアに帰ろうと思っていた。ニルファには下サフェドビ村に住むアジズという恋人がおり、婚礼を間近に控えていたが、ニルファは結婚した後も観測の手伝いをするつもりだった。

ところがある日下サフェドビ村に軍隊が来て、上サフェドビ村と下サフェドビ村の境に有刺鉄線を張り、これを国境にすると宣言する。往来をするには50キロ先の検問を通るように言う。学校や産院は下サフェドビ村にしかないため、村人たちは反発する。村人は有刺鉄線を挟んで物のやり取りをし、先生は有刺鉄線を挟んで授業をするのだった。

ニルファの母親は臨月のため子どもが生まれそうになる。キリルは鉄線を切断し、母親を下サフェドビ村の産院へ送る。すると軍隊は国境に地雷を埋め、村人が国境に近づかないようにする。ニルファの結婚式の前日、キリルは地雷探知機を作り、地雷がどこに埋められているか調べて印をつけ、ニルファの家族を通行させようとする。

(解説)

この映画に描かれる国境はウズベキスタンとタジキスタンの国境で、ウズベキスタンの独立は91年、タジキスタンは92年である。ウズベキスタンは当時他国からの反政府ゲリラの侵入を恐れて国境に地雷を設置した。しかし二つの村は、国境となるにはあまりに

も近い関係にあり、長年に渡り共同体のように暮らしてきたのだ。この村の間が国境となるのは理不尽でしかない。政治の理不尽さは、一般市民の生活とかけ離れたところで物事が決まり、人々が翻弄されるところにある。リズムカルな音楽、カラフルな民族衣装と、タジキスタンの美しい山々も本作の見どころである。アジアフォーカス・福岡国際映画祭観客賞を受賞した傑作。

ノシール・サイドフ監督プロフィール

1966年タジキスタンに生まれる。タジキスタン国立大学芸術研究所映画監督学部を1989年に卒業。その後、タジキスタン国営テレビ局に就職し Bakhtiyar Khudaynazarov 監督作「Luna Papa」(’99年)及び「The Suit」(’03年)の助監督を務める。長編映画監督としてのデビュー作にあたる「トゥルー・ヌーン」(’09年)はインド・ケーララ国際映画祭(2009年)で最優秀監督・観客賞、イラン・ファジル国際映画祭で最優秀作品・監督賞、またロシアの巨匠映画監督アンドレイ・タルコフスキーを称える Zerkalo 国際映画祭では最優秀男優賞を受賞している。

(アジアフォーカス・福岡国際映画祭カタログより)

監督メッセージ

この私の作品「トゥルー・ヌーン」が最初に上映されたのは、日本の東京でした。そのときに私は自分の映画の登場人物たちに日本の観客が共感してくれるのを見て、大変嬉しく思いました。

そしてこのアジアフォーカス・福岡国際映画祭で、この作品をまた上映できることを、このうえなくうれしく思います。福岡でも再び日本の観客の皆様の良い反応を見ることができると確信しています。

国の違いにはなんの意味もないことが私にはわかります。もし私たちが普通の人々の物語を描けば、どこへ行っても、その物語が独自の方法で他国の人々の心を開いてくれるからです。人間の心には国境はないのですから。

この映画はロシア人の運命を語るだけでなく、ふたつの村の分断も描いています。これは、タジクとウズベクというふたつの特定のキシュラク(村)の歴史を反映していますが、地域の重要問題のみならず、ひとつの世界的特徴も描いているのです。私たちは境界線上で生活するように強いられてきました。私たちは明日目覚めたときに自分がどのような国の住人になっているかもわかりません。またキリル・イワノビチやほかの映画の登場人物たちに起きたことが、私たちの誰に起きるのかもわからないのです。

「境界の上に生きる」ということが生活方法になってしまいました。それは私たちの意識の中に広がっていき、嘆かわしいことに、自分たちがそれに慣れてきてさえいるのです。

ノシール・サイドフ

(アジアフォーカス・福岡国際映画祭カタログより)